

特別展十年の回顧

—長かった苦渋の道—

小林貞七



私の博物館長就任は昭和43年4月、今春で満10か年を経過した。最初の年は別として、昭和44年以来毎年2回以上の特別展を企画し、実施してきた。以前には人手不足もあって、とてもそんな計画が持てなかつたことは、いささか残念なことであった。

館長就任早々に、私はまず山積する資料の整理から着手した。かって一度も足を運んだこともなかつたいずれの資料室も克明に見て廻った。長い年月に収集された各種各様の資料がひしめいていた。これはもつたいない、何を差し置いても、早速に整理しなければ博物館の面目すら保てないと、いやに重苦しい責任感を覚え出したのである。それにいまひとつには、常設展示が創設以来何等の変化も進展も見当らないことだった。これではきっと大衆に飽かれる博物館となることは必定と、こんなことにもまた一種のあせりや不安に似たものを感ずるようになってきた。

小さくてもよい、どこかに光をともそうと考えたのが、『福井県のかに展』であった。かに展に至った動機は、開館準備の昭和26年以来、私は主として海の動物を中心とした仕事を担当してきた。それに、毎年カニの世界的権威者 酒井恒博士にご指導を頂いたカニの資料が豊富であり、なおまた、ズワイガニで有名な福井県であることにも心が動いた。昭和43年の年暮れに腹

をきめ、準備に取りかかった。たった一人で立案し、準備し、標本作製からパネル書きまでにまっしぐらだった。私が特別展と名のつくものと取り組んだのが、これが最初であった。全く要領も分らないままの我武者羅な猛進だった。

企画も我流、資材も皆無、それに特別展のための予算もゼロ、会場に特別展のための設備も何ひとつ無し、今から思えば全く無謀なスタートだった。準備のために3月も4月も土・日曜返上で博物館に出掛けて一生懸命だった。5月14日のオープン間際まで、館外の誰一人私の企画や作業を知るよしもなかった。いよいよ会場を設営し展示となると、どこで知ったか博物館の協力員の何人もが、加勢に駆けつけて下さった。漸くにして会場いっぱいに展示が完了したがそこぶる素朴で、不完全極まるものだったが、これが吾が博物館の特別展の先駆ともなったのだから、記念すべき催しといってよいであろう。

私は準備を進めていく中で、いろいろのことを痛感した。第1に吾が身の学識の浅薄さ、経験の乏しさをいやという程感ぜさせられた。第2に人手がほしい、金がほしいと思った。資料の整理から一人でしてかかるのではとてもとてもことである。絵具ひとつなし、パネル材料も自前では余りに情けない。この実情は追々に市当局にも理解が得られ、その後に職員の増員も実現し、企画のための予算もつけて貰えることとなったので、今まで毎年に特別展の継続実施が可能となってきたのである。

特別展にはどんな準備と努力が必要だったのだろうか。第1には、資料が豊富に取り揃えておかねばならないこと。第2には、常々どの資料も整理が行なわれていること。第3には、それ等の資料をどう選択し、活かしていくかを考えること。第4には、どんなテーマを設定し、構成するかを研究すること。第5には、入館者にどう興味深く見て貰い、理解して貰えるかを十分に考察して、準備を進め、展示を行なうこと。第6には、特別展のためのPRをどうするかを考慮すること。第7には、開催期間中に努めて会場に出てガイドに励み、効果を高めること。第8には、特別展終了後にその成果を活かす工夫を忘れないこと。第9に、準備から完了までの記録を残すこと。第10に終了後に卒直な評価を行ない、後後に活かす工夫をすること等。

実施してきた特別展の価値と意味はどこにあったのだろうか。過去何回かのものを振り返って見るに-----ともすると、単調と安易に流れ易い博物館に、若干の新風を流すことができたこと。学生が学期試験には勉強にひたむきになるように、吾々館員が一丸となって特別展開催を目標に頑張らねばならないことで、一定の事物について真剣に研究し、準備を進める態勢が整ってきたこと。そのつど、いくらかずの知識や経験を積み重ねていくと同時に、資料が整えられ、且蓄積されてくる等の効果を生んできたように思う。

常設展示は久しい間固定していても差支えないものと、時をおいては更新されることが好ましいものとがある。この更新は言うは易いが仲々に実現し難いものである。吾々は特別展毎に、その資料（パネル、標品、模型等）を常設展に転用することを心掛けているのである。こうして特別展は常設展に波及することがしばしばであった。もし展示場がいま少し広かつたら、特別展の幾コナーかをそっくり常設展示場に移したいと思うことも少なくなかった。毎回苦心して描き

あげ、作り出された模型等までが捨て去られるか、片隅におしまれて何時しか忘れ去られるのがおち。また、構成されて一般にアピールした苦心のコーナーが解体されて跡形もないなれの果てには、何とも愛惜に堪えなかつたことが再三であった。

展示の資料は自前か自作を原則としてきた。特殊な企画でない限り、すでに整理保管されている吾が館の資料か、あるいは吾々の手によって必要に応じて採集したり、製作した模型等で構成したのである。例外といえば、沖縄復帰の記念昆虫展と昆虫特別展二次展のみは、本館協力委員下野谷氏からの借用したもので実施した。この様な場合でも、パネル類だけは吾々の手で作り上げたものだった。

昨年の秋に県主催の市民生活展が、かなり大規模に行なわれた。パネルはことごとく業者へ委託、展示物品も総て他に依頼するか、もしくは、借用物であった様に見受けられた。主催者は企画し、費用を捻出することで、こと足りたと聞いている。この諸経費が300万円を超したとか。吾が館が一切を数万円で賄うのとは雲泥の違いである。

次にはどんな特別展にしようかと心積りするのは、たいてい一年前からであった。テーマを設定してどの様に構成し、そのためにどの資料を登場させたり、また収集し製作するかなど考えて、これでいこうとレイアウトまでできるのには、決断の遅い私には一ヶ月以上も必要とすることが常であった。取り分けテーマの決定がむずかしい。私は毎回に、テーマ則キャチフレーズとの思いで臨んだ。その数例を述べよう。今度は化石展だという際に『化石は語る』を副題として、化石への関心と興味を盛り上げることにまず成功した。当初に述べた様に、所蔵資料を逐次登場させることを大方針としていたので、今度は小規博物館にはちょっと例がないほどの多数の海産動物の液浸標本を活用するのに当って、標本ピンを林立するのみでは無味乾燥で、何か意味づけが必要であると、思案した揚句が『海こそ吾が命』ということにした。海は生命の故郷であることを説き、動物進化の跡を辿ったり、その海が公害で多くの動物が危機に直面していることを訴えたりで、時の問題にまで発展させることを試みたのである。今度は野鳥でという巡り合せには、やはり公害問題や乱獲といった時事問題と連動させて、『滅びゆく鳥』としたのである。一番に困ったのは植物を中心においた企画であった。なぜか常設展示の中で植物コーナだけは立止まって熱心に見て下さる人は希である。しかしだひとつ薬草の小展示のみは例外で、足を止めて見入る人も少なくない。こんな事実から、植物を題材とする特別展は『薬草を見直そう』でいこうと決意した。時恰も薬草ブームとあって、この発想は私の企画中の最高の結果を生むこととなつた。春秋2回の特別展は大繁昌、つまりは、時代の流れに乗つたからである。ともかく来観者の熱心さには圧倒されそうな熱気を感じた。腊葉などには日頃もくれなかつた人々が、薬草標本だけには来観者の誰もの眼が輝いた。

常設展示にせよ、特別展にせよ、観て貰えないのでは全く意味がない。観て貰うためにどんな構想のもとに企画するか、大衆にどう呼びかけPRするか、資料の整え方、そして注目を引く展示の仕方、観る側のテーマに対する期待感の洞察とこれへの対応、時代的な要請をどう盛り込むか、等々考えると仲々に容易ではない。

私の期待に反して反応の乏しかったのは、『足羽山の自然展』であった。随分苦労を重ねた割には興味と関心が湧かなかった。なぜだろうか。この二次展では少しでも興味の呼び水ともしたいと、足羽山の万葉植物コーナーまで設けてみたが、短歌愛好家の関心の的となった程度に過ぎなかつた。これとて大衆への洞察力を欠いたに外ならない反省している。市側の勧めもあって、さらに市民ホールで、足羽山特別展出張展を行なつた。かってない意欲的試みであったが、思った程の人気は生れず、重ねての期待外れであった。市民にとって目と鼻の近くにある足羽山など、大して関心がないということなのだろうか。それとも人を引く内容を持たせられなかつたためだろうか。

『資料ルーツ展』は他にはあまり類例のない試みだったと思っている。昨年7月に初代の館長堀先生が亡くなられた。傑出した堀先生を追想する記念展と併せて、創立以来26年の間に、吾が館のためにお尽し下さった、7人の先輩各位の顕著な功績を、本館に所蔵する各位の資料と、各先生の面影を紹介することで顕彰しようとの構想であった。

この異例の特別展には、発想や企画が大分動きを異にし、標題にも目新しさもあって、マスコミ等が注目するところとなり、各方面の報道となつたこともある、一般への関心を高める結果ともなつたことは、ありがたい次第だった。52年度最終の博物館だよりには、8人のルーツを子供向きに特集した。これをご覧下さった東洋大学の大野正男先生、京大の瀬戸臨海実験所長の時岡隆先生のお二人から、良い趣旨の特異な特別展だとご感想をわざわざ書面でお寄せ下さったほどである。それにも増して嬉しく思われたのは、ルーツ8人のご遺族の感謝のお気持だった。特別展に先立つて、ルーツ8人の先生方の供養の法要を、ほんの内輪だけで厳修させて貰つたこと、終つて整備された資料室へご遺族を案内して、それぞれに手掛けられた資料と対面して頂いたことなどで、皆様に大きな感動がまき起つたことは私にとり、忘れられない印象となっている。このご遺族の集いがあった後も、他の親身の方々が特別展に来訪され、何れも感慨深げなご観覧が続いた。特別展もさることながら、ご遺族に対しさらには8人の物故ルーツの先輩諸靈に対し、いささかお慰めすることができたと、自己満足にも似たものを覚えている。

ミニ展ではあったが、人々に深い感銘を与えたものに、『華麗なおしば小展』がある。生死も分らぬ出征軍人の戦場に咲く花のおしば集で、南方の各地に転戦し、そこに戦塵にまみれて咲く花を小冊子に挟んで作ったおし花。どこの誰かも分からぬ旧軍人のもの。いまひとつは、老人ホームで余生を送る孤独の身で、手なぐさみにおしば作りで日々を楽しんでいる老人のおしば小品集。いずれもまことにさゝやかだが、人の心を打つ心情的展示であったと信ずる。小さくても大きく報道されることとなつたことは勿論である。

私の館長10年間に企画した特別展を一覧しよう。

年 度	特 別 展 名 及 副 題	期 間	備 考
S 4 3	深海魚小展	10／1～10／5	県産深海魚
S 4 4	福井県産かに展	5／4～5／30	講堂全面使用

年 度	特 別 展 名 及 副 題	期 間	備 考
S 4 4	ミイラ小展	6／20～7／20	魚類、両棲類、爬虫類の乾燥標本
"	貝類珍種展	8／10～9／10	桑原氏寄贈の南洋貝類
S 4 5	化石展（化石は語る）	5／1～6／7	福大三浦先生、足羽中北川先生の協力を求める
"	野鳥展（滅びゆく鳥）1・2次展	10／18～11／5 3／10～4／20	公害問題主張 東谷前館長協力
S 4 6	海の動物展（海こそ吾が命） 1・2次展	10／4～11／14 3／10～4／20	創立20周年記念展 生命の起源、自然保護、開発等
S 4 7	沖縄の蝶展（沖縄復帰記念展）	5／15～6／11	下野谷豊一氏資料借用
"	県産淡水魚小展	6／14～8／22	故五十嵐氏記念展
"	おしば小展（華麗なおしば）	8／19～9／20	戦場に咲く花 老後の手なぐさみ
S 4 8	愛鳥展	3／24～5／20	愛鳥クラブで誕生記念展
"	薬草展（薬草を見直そう） 1・2次展	10／6～11／16 3／20～4／20	
"	薬草展資料巡回展	18回	公民館、婦人学級、学校祭等
S 4 9	昆虫展（昆虫の世界）1・2次展	10／4～11／10 3／20～4／20	二次展下野谷氏資料多数
S 5 0	岩石展1・2次展	10／10～11／10 3／20～4／20	福大三浦先生、教育研究所吉沢先生の指導と協力を求める
S 5 1	エネルギー展	7／20～8／10	原子力展を変更
S 5 2	足羽山の自然展 1・2次展	3／20～4／20 10／8～11／6	創立25周年記念展、福大香室先生教育研究所吉沢先生の指導を求める
"	全上市民ホール出張展	11／18～11／28	最初の企画出張展
S 5 3	資料ルーツ展	3／20～4／20	物故者8人の資料を中心とした故人の顕彰展

以上の外に従前から毎年に実施されていたものに、採集品優秀作品展がある。例年9月中に開催するのを慣例としていた。数日の短期間特別展で、市内小・中学校の児童・生徒の選抜された作品展である。この主体は市内の小・中学校の理科研究部会であるが、当館が主旨に協賛し、会場を提供の上で格別優秀なものには市長名の賞状と賞品まで授与するのを例として来た。この特別展は博物館活動の延長線上にあるもの様に一般には理解されてきた。

来る年毎の特別展に費やされる、心身の苦労は可成なものであったが、吾々はこの事のために

計画的に資料を収集し、あるいは整理し、様々な勉強も重ねて來たことで、各自をいくらかずつでも充実させることができた。特別展はやがて常設展にも波及して、若干の新生面を創出することができたことも、いまひとつの収穫であったと思う。

ここ10年間の特別展には、展示資料の多くは館所蔵資料、もしくは、吾々の手によって収集され、作製されたものを原則として來たことは再三述べたことである。しかしこの原則をいつまでも墨守することは困難であろう。万事自前主義から脱却して、逐次他からの資料も導入して、新たなテーマも設定し、魅力ある特別展を構成する時期となってきたと思う。それには、学芸員の充実、展示場の拡大、予算の増額が基本的条件となるであろう。

“人間は21世紀に生き延びられるか”と大向うを張った特別展が、さるアメリカの博物館で開催され、人々の注目を浴びたという。この様な真似はできそうにもない。しかし押し寄せる人間の危機に、自然史博物館的構想で警鐘を打ち鳴らす様な企画が、今後に計画されてもよいはずである。吾が館は過去何回か、極控え目ながら、その願いを込めて実施したことが再三だった。繰り返しになるが、海の動物展にも、野鳥展にも、足羽山の自然展にも、どこかにその願いを籠めておいた。あまり迫力の乏しい訴え方で、果して来観者にどれだけのことを感じ取って貰えたかは疑問であるが。

特別展実施10年にして、その意義をとくと考えてみたいものである。また、市民の皆様が今までのものに対して、どんな感想をお持ちになったかを聞かせ下さるならばと思う。その上に立って今後の展開を計るべきであろう。

ともあれ、特別展は博物館の前進のために、博物館の存在意義発揚のために、さらには自己研修のために、積極的に取り組むべきものであると確信する。しかし現状の博物館では幾多の獵路がある、苦難に満ちたものであることも十分に予想し、覚悟しなければならないところである。

博物館長就任当初私は2、3年でその職を辞すつもりでおったのに、とうとその何倍もの年月を過してしまった。その間、自主的な發意による特別展でありながら、毎回の苦渋は一通りではなかったと回想している。だが不思議とそれに生甲斐の様なものを感じては、駿馬に鞭うって長年月を送ることができた。

毎朝の目覚めには決って今日一日の仕事をどうするかの思案が、床の中で日課の様に続けられた。特に特別展前後の長考は普通に倍していた。そんな目標と励みがあったればこそ、生活に張りが生れ、虚弱な体にも緊張が保たれて今日に至ったのだと思っている。しかしもう限界に来た。そんなことをつくづく感ずる昨今である。

遠からず久しく念願していた博物館の拡張工事も実現する運びとなって來たようで、何とも嬉しい限りである。“新し酒は新しい皮袋に盛れ”との格言の様に、新生の博物館は心身共に健やかな新人によって當まれるべきである。苦渋の道を歩み続けた老兵には、もう退陣の幕を降ろす時期が到来したと思っている。

昭5.3.5.10記